第４部　全体のまとめ

１．ひきこもり本人の年齢の推移

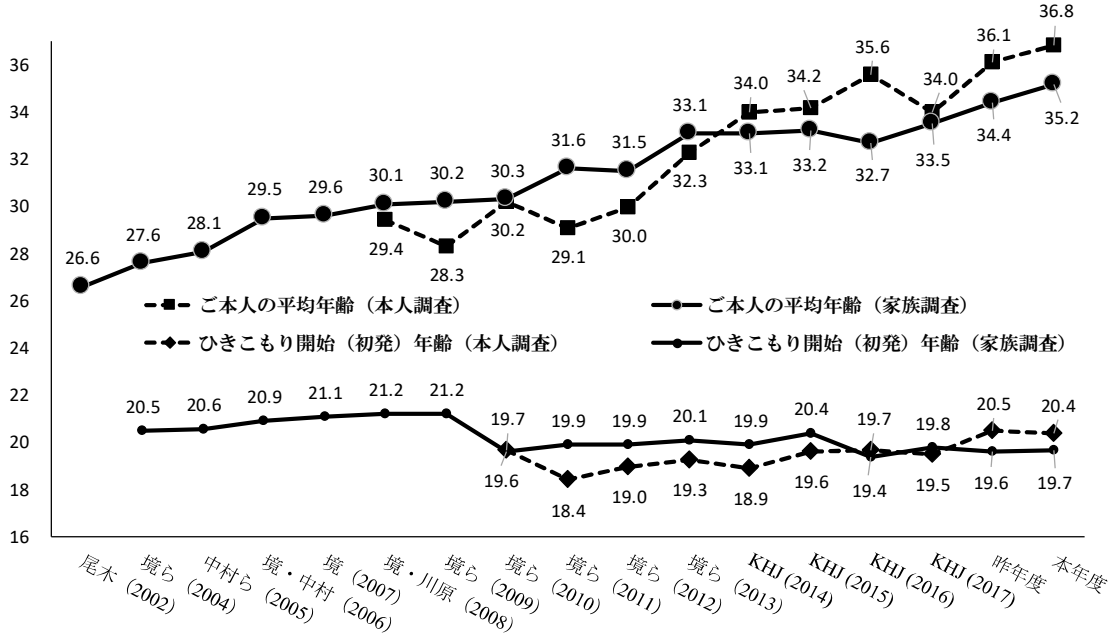


図４－１　ご本人の平均年齢の推移

当会の調査を開始した 2002 年以降のご本人の年齢の推移を図４－１に示しました（中村ら, 2005；尾木，2002；境ら，2004；2005；2007；2008；2009；2010；2011；2012；2013；特定非営利活動法人全国引きこもり KHJ 親の会, 2014；特定非営利活動法人全国引きこもり KHJ 親の会, 2015；特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会, 2016；2017；2018）。図中の実線の折れ線は家族調査の結果を示し，点線の折れ線は本人調査の結果を示しています。

家族調査の結果をみると，ご本人の平均年齢は本年度 35.2 歳となり，昨年度からさらに１歳近い上昇が認められました。最近４年間は毎年１歳近く平均年齢が上昇しており，本年度はこれまでの調査で最高年齢という結果になりました。さらに，本人調査の結果の推移をみると，2013 年までは一貫して家族調査よりも低い平均年齢でしたが，2014 年から逆転し，今年度も同様の結果でした。さらに，本年度は昨年度に引き続き過去最高年齢を更新しました。

本実態調査からもますます高年齢化したひきこもりの実態が示されており，いわゆる「８０５０問題」という言葉に代表されるように，高年齢のひきこもりのニーズに合わせたサポートを充実させることが重要であると考えられます。

その一方，家族調査におけるひきこもりの開始（初発）年齢については，これまでと同程度の平均年齢であることが示されました。ひきこもりの開始年齢の結果は，一貫して中学生から 20 代のひきこもり好発期における予防的対応の重要性を示唆しているものと考えられます。本人調査の結果では，昨年度にひきこもりの開始年齢が 1 歳近く上昇しましたが，その傾向は今年度においても継続している結果がみられました。その一方で，ひきこもりの開始年齢に関しては，ご本人の平均年齢の上昇と比較すると，それほど大きな変化がみられていません。ひきこもり期間の推移の結果と合わせると，これらの結果は，ひきこもりの長期化を反映している可能性があります。

２．ご家族の年齢の推移

2006 年以降の当会の調査における，ご家族の平均年齢の推移を図４－２に示しました。ご家族の平均年齢は，昨年度から 1 歳以上の上昇が認められており，昨年度に続いてこれまでの調査で最高年齢を記録し，初めて 65 歳を超えました。近年，公務員を含めて定年が 65 歳に引き上げられるという変化も生じていますが，本年度の結果からは，その 65 歳をも超えるご家族が少なくないことがわかります。さらには，今後，家族会にも参加が困難になり介護が必要な家族が増加することが推測されます。したがって，このようなケースにおいて，生活そのものを成り立たせるための対策が急務であるでしょう。

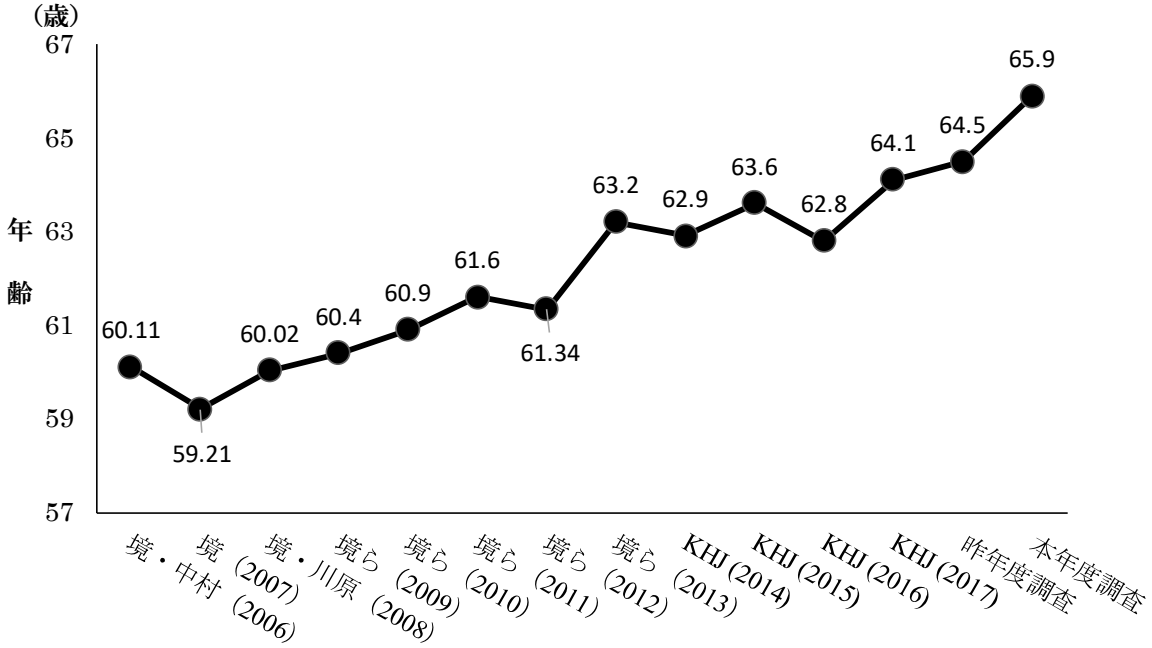


図４－２　ご家族の平均年齢の推移

３．ひきこもり期間の推移

2005 年以降のひきこもり期間の推移を図４－３に示しました。家族調査におけるひきこもり期間は，昨年度，一昨年度よりも１年以上短いという結果が示されましたが，今年度は昨年度から２年以上長いという結果でした。今年度の平均ひきこもり期間 12.2 年という結果は過去最長の期間であり，この傾向は家族調査だけでなく本人調査でも認められました。家族会参加者には，これまで以上に長期化したケースが増えている可能性があります。

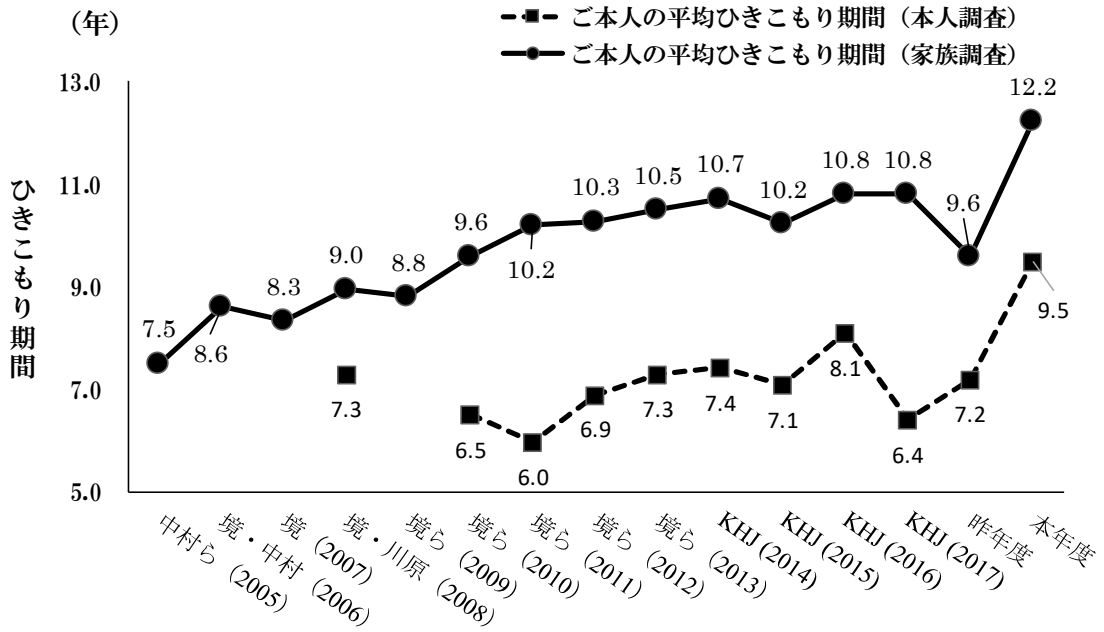
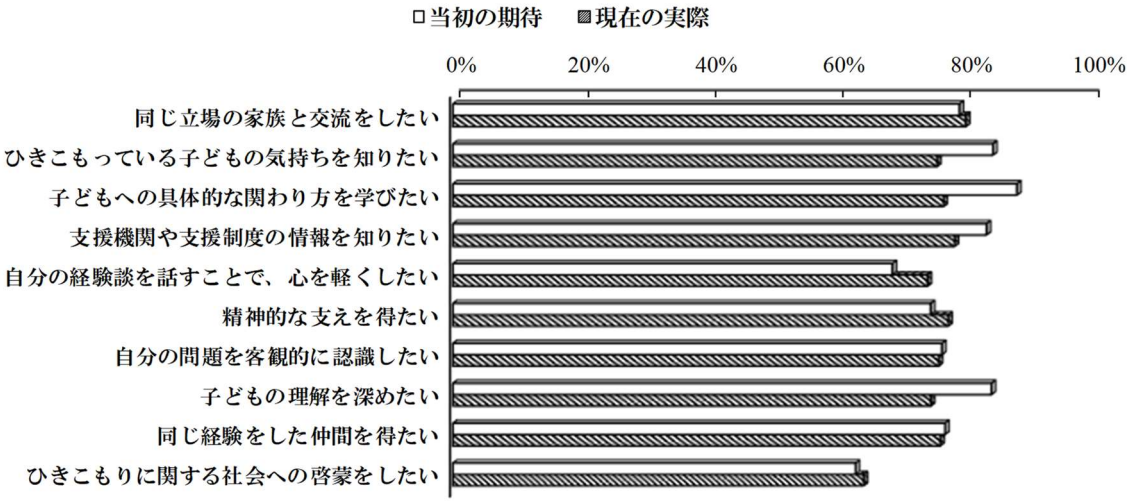


図４－３　平均ひきこもり期間の推移

４．家族会に期待していたこと，実際に得られたことの比較

家族調査において，初めて参加したときに家族会に求めていたこと（期待）と実際に得られたこと（実際）を比較したものが図４－４です。それぞれの項目について，割合が高いほど「期待していた」または「得られた」ことを示しています。

図４－４．家族会参加への期待と実際（家族調査）

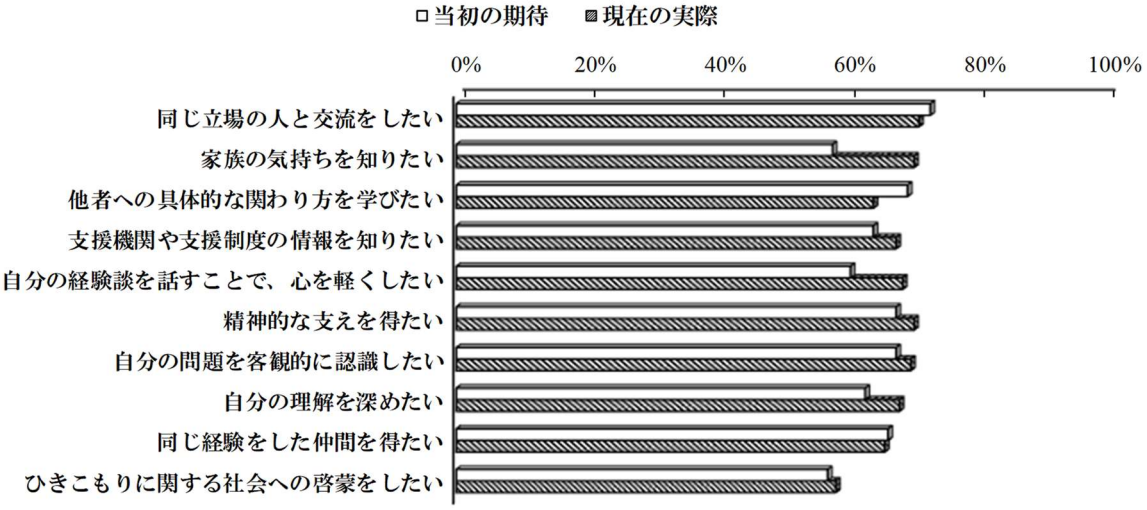


10 項目のうち，「自分の経験談を話すことで、心を軽くしたい」，「精神的な支えを得たい」に関しては，当初の「期待」よりも「実際」の方が高いという結果が示されました。これらは統計的にも有意な違いがみられました。したがって，家族が気持ちを軽くしたり精神的な支えを得たりする役割を家族会が期待以上に担うことができており，これらの役割を家族会が担うことによって家族会への継続的な参加につながると考えられます。

その一方で，「ひきこもっている子どもの気持ちを知りたい」，「子どもへの具体的な関わり方を学びたい」，「支援機関や支援制度の情報を知りたい」，「子どもの理解を深めたい」に関しては，当初の「期待」よりも「実際」の方が低いという結果が示されました。これらは統計的にも有意な違いがみられました。したがって，子どもの気持ちなどの理解や具体的な関わり方，支援情報の提供については，当初の期待通りまでには至っていないといえるかもしれません。

また，本人調査において，初めて参加したときに家族会に求めていたこと（期待）と実際に得られたこと（実際）を比較したものが図４－５です。それぞれの項目について，割合が高いほど「期待していた」または「得られた」ことを示しています。

図４－５．家族会参加への期待と実際（本人調査）



10 項目のうち，「家族の気持ちを知りたい」，「自分の経験談を話すことで、心を軽くしたい」に関しては，当初の「期待」よりも「実際」の方が高いという結果が示されました。これらは統計的にも有意な違いがみられました。したがって，家族の気持ちを知ったり自分の気持ちを軽くしたりする役割を家族会がご本人の当初の期待以上に担うことができており，これらの役割を家族会が担うことによって家族会への継続的な参加につながると考えられます。

本人調査においては，当初の「期待」より「実際」の方が低い項目はみられませんでした。

５．40 歳を超える高年齢化事例の特徴

本調査では，ご本人の年齢が 40 歳以上の場合と 40 歳未満の場合を比較することで，どのような特徴が認められるかを検討いたしました。本人調査では，40 歳未満の事例が 37 名，40 歳以上の事例が 13 名（26.0%）でした。また，家族調査では，40 歳未満の事例が 204 名，40 歳以上の事例が 93 名（31.3%）でした。

また，家族調査，本人調査ごとに，40 歳以上の割合，および 50 歳以上の割合の推移を図４－６に示しました。家族調査の結果をみると，大幅に 40 歳以上の占める割合が増加しており，2004 年（2.9%）と本年度（31.3%）の割合を比べると，約 10.8 倍にも及ぶことが分かります。さらに，50 歳以上の占める割合も増加しており，本年度の本人調査では 1 割を超えています。家族調査で 50 歳以上と回答したケースでは，兄弟姉妹による回答もみられ，いわゆる「８０５０」問題と兄弟姉妹による相談の深刻化が懸念されます。

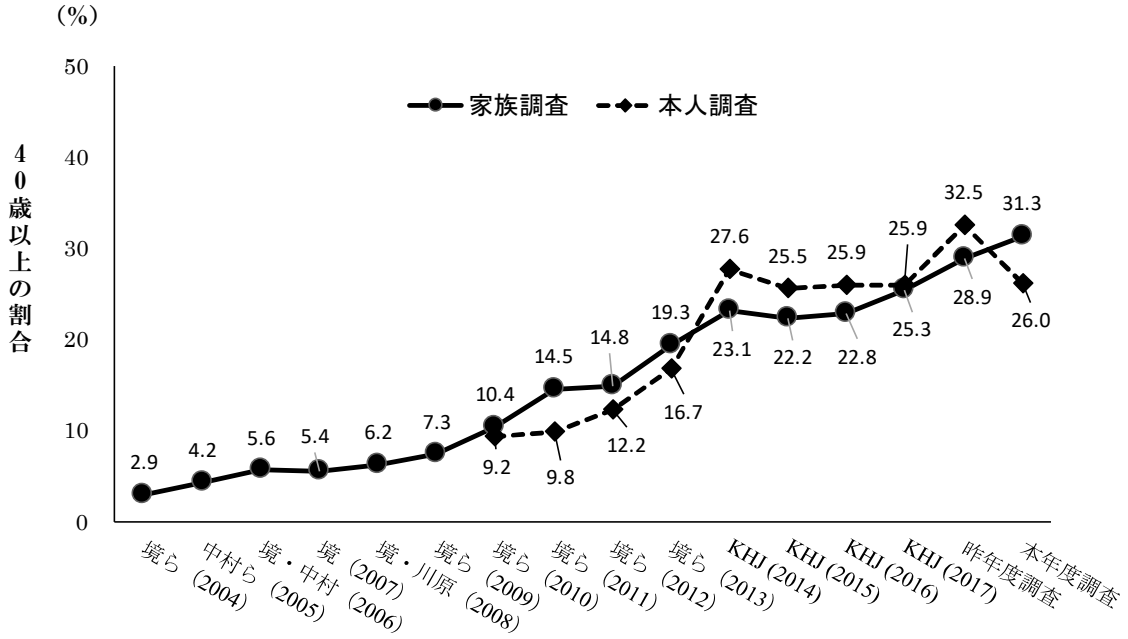


図４－６　40歳以上の割合の推移

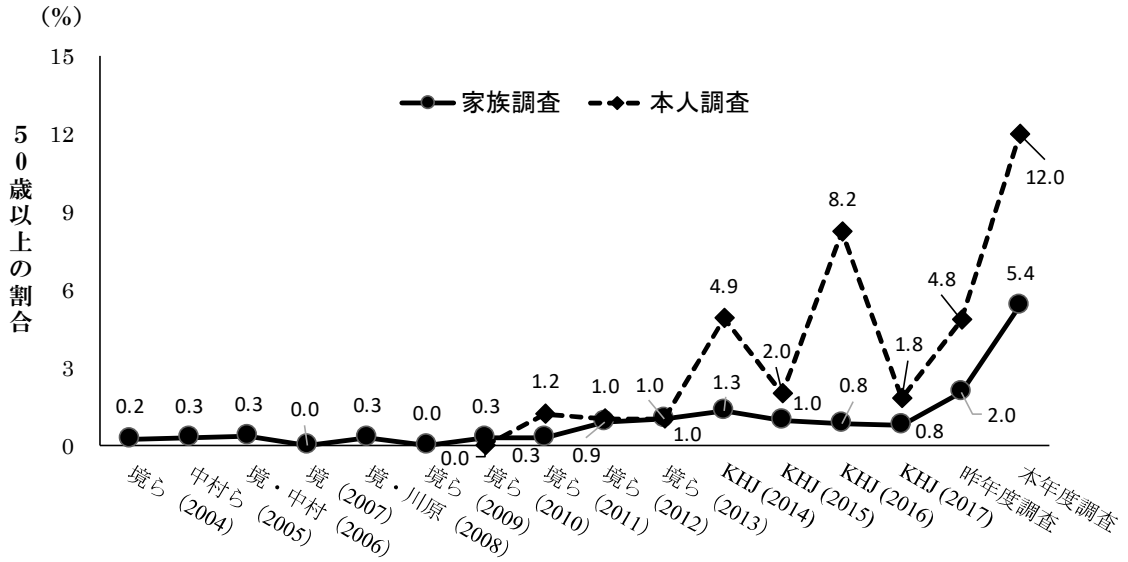


図４－６　50歳以上の割合の推移

（１）ご本人の性別

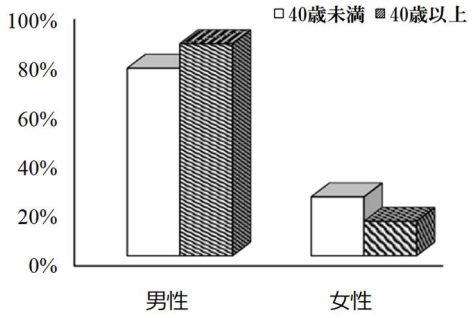


図4－7. ご本人の性別の割合（家族調査）

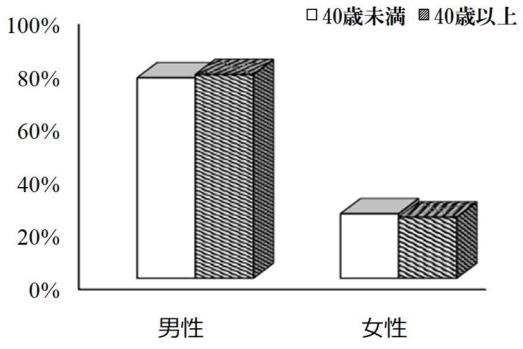


図4－8. ご本人の性別の割合（本人調査）

ご本人の性別について，図４－６は家族調査，図４－７は本人調査の結果を示しています。いずれの場合も，40 歳未満の事例と 40 歳以上の事例の場合に，割合の統計的な違いはみられませんでした。この傾向は，昨年度と同様であり，これらをふまえると，高年齢化する事例に性別の違いはないと推測できます。

（２）ひきこもり期間

図４－８は家族調査，図４－９は本人調査について，ひきこもり期間を 40 歳未満の事例と 40 歳以上の事例で「現在ひきこもり状態にある人」，「現在は違うが過去ひきこもり状態にあった人」それぞれを比較した結果が示されています。本人調査，家族調査のいずれも，40 歳以上の事例の方がひきこもり期間が長いという結果でしたが，この傾向は昨年度と同様でした。また，現在ひきこもっている 40 歳以上の事例の平均ひきこもり期間が家族調査では 18 年近くにおよび，本人調査では該当者が極めて少ないものの（3 名），20 年を超えることが示されました。

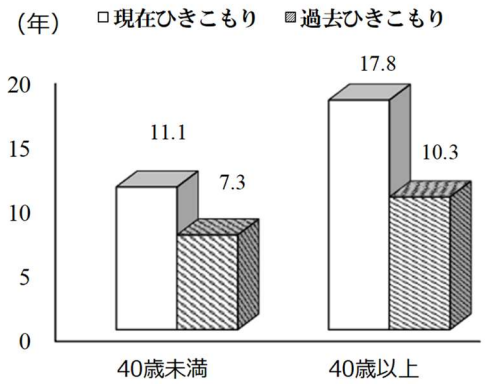


図4－9. ひきこもり期間（家族調査）

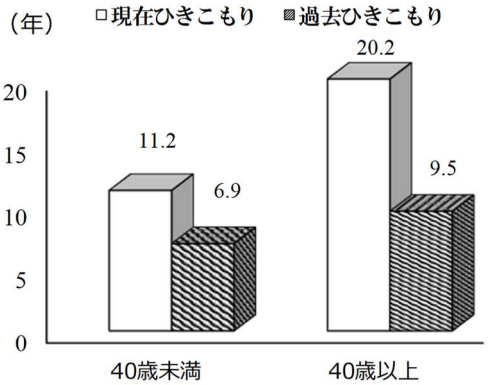


図4－10. ひきこもり期間（本人調査）

（4）ひきこもりの程度

図４－10 から図４－21 はひきこもりの程度を，40 歳未満の事例と 40 歳以上の事例で「現在ひきこもり状態にある人」，「現在は違うが過去ひきこもり状態にあった人」ごとに比較した結果です。家族調査では，「対人交流が必要ない場所に行く」以外の項目に関して，現在ひきこもっている人よりも過去ひきこもっていた人の方が当てはまる程度が高いという結果でしたが，40 歳以上と 40 歳未満の場合に違いはみられませんでした。昨年度の調査では，40 歳以上の方が 40 歳未満よりも「自由に外出する」と「対人交流が必要でない場所に行く」ことができているという結果でしたが，今年度は一貫した結果ではありませんでした。その一方で，本人調査では，40 歳未満の方が 40 歳以上よりも「家庭内では自由に行動する」ことができていることがわかりました。また，現在ひきこもっている人では 40 歳以上の方が 40 歳未満よりも「自由に外出する」ことができていることがわかりました。これまで，ひきこもりの程度については，40 歳未満と 40 歳以上で一貫した結果が出ておらず，年齢以外の個人差が大きいといえるでしょう。

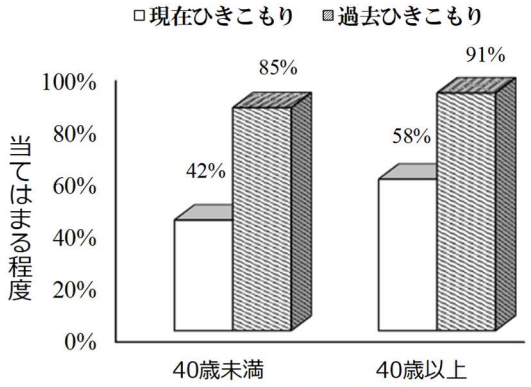


図4－11. 自由に外出する（家族調査）

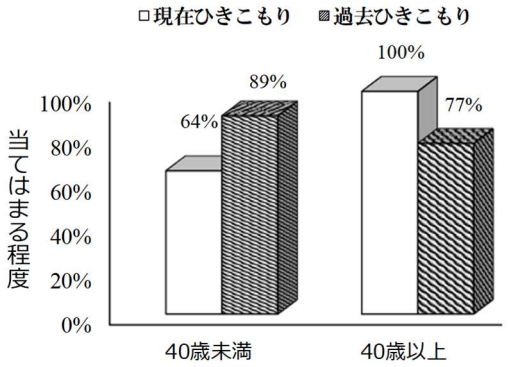


図4－12. 自由に外出する（本人調査）

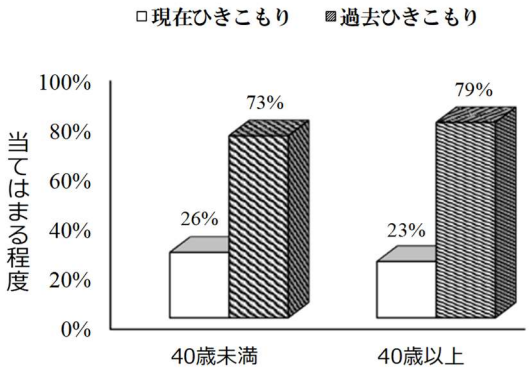


図4－13. 対人交流が必要な場所に行く（家族調査）

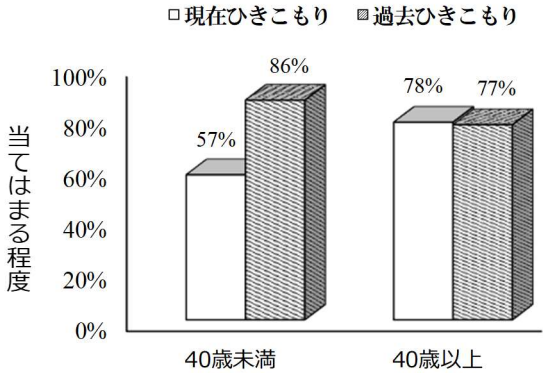


図4－14. 対人交流が必要な場所に行く（本人調査）

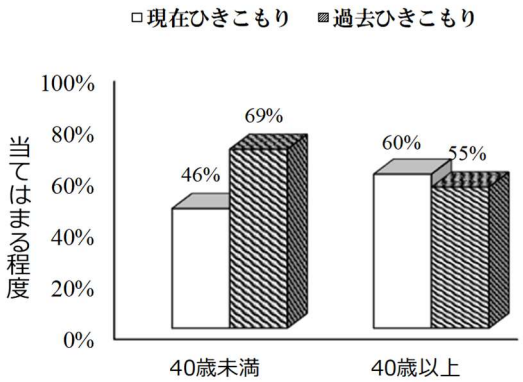


図4－15. 対人交流が必要ない場所に行く(家族調査)

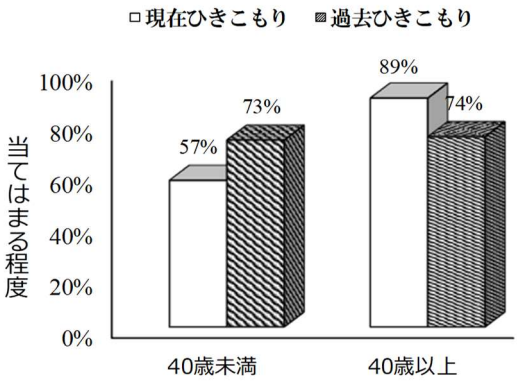


図4－16. 対人交流が必要ない場所に行く(本人調査)

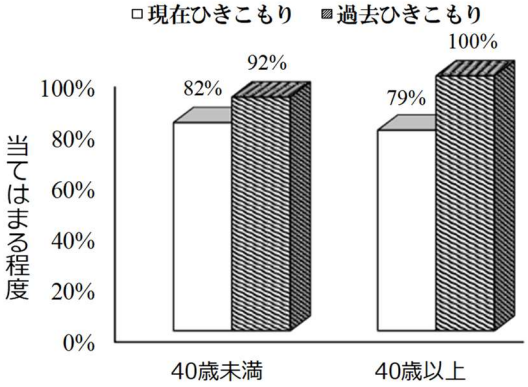


図4－17. 家庭内では自由に行動(家族調査)

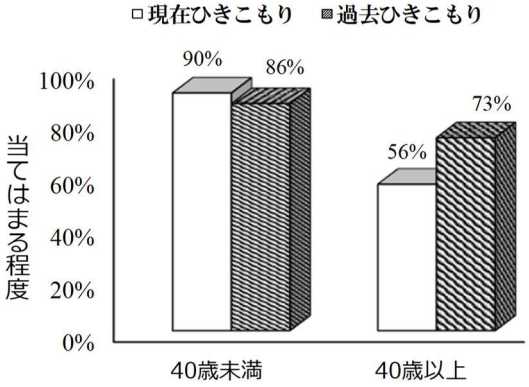


図4－18. 家庭内では自由に行動(本人調査)

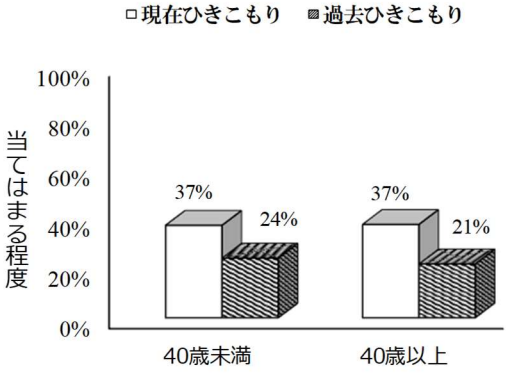


図4－19. 家庭内で避けている場所あり(家族調査)

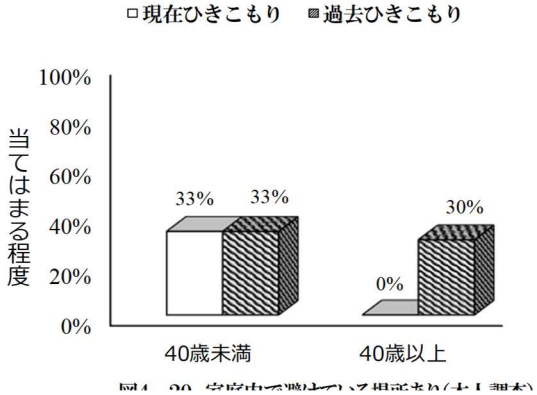


図4－20. 家庭内で避けている場所あり(本人調査)

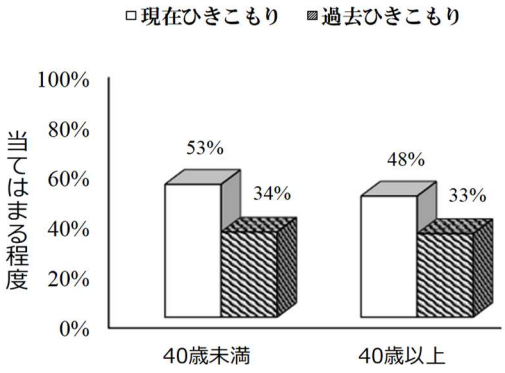


図4－21. 自室に閉じこもる(家族調査)

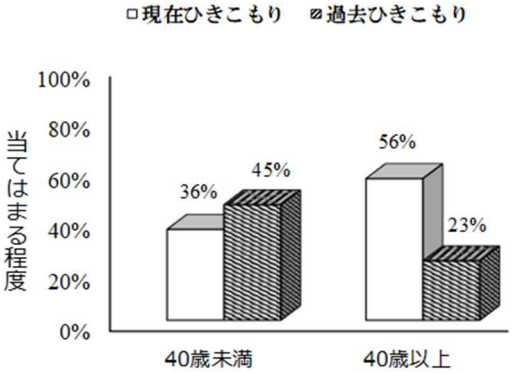


図4－22. 自室に閉じこもる(本人調査)

（５）ご本人の支援・医療機関の利用の割合

図４－２２は家族調査，図４－２３は本人調査について，ご本人の支援・医療機関利用の割合を，40 歳未満と 40 歳以上で比較した結果を示しています。いずれもご本人の支援・医療機関利用の割合を示していますが，家族調査と本人調査で異なる結果がみられました。昨年度の調査では，本人調査において，40 歳以上の場合の方が支援・医療機関を継続的に利用している人が少ないこと，および利用経験がない人が多いことが示されましたが，今回の調査では，家族調査，本人調査ともに，40 歳未満の場合と 40 歳以上の場合で違いはみられませんでした。

また，図４－２４は家族調査，図４－２５は本人調査について，ご本人の支援・医療機関利用を中断した経験のある割合を，40 歳未満と 40 歳以上で比較したものです。中断の経験についても，家族調査，本人調査ともに，40 歳未満の場合と 40 歳以上の場合で違いはみられませんでした。

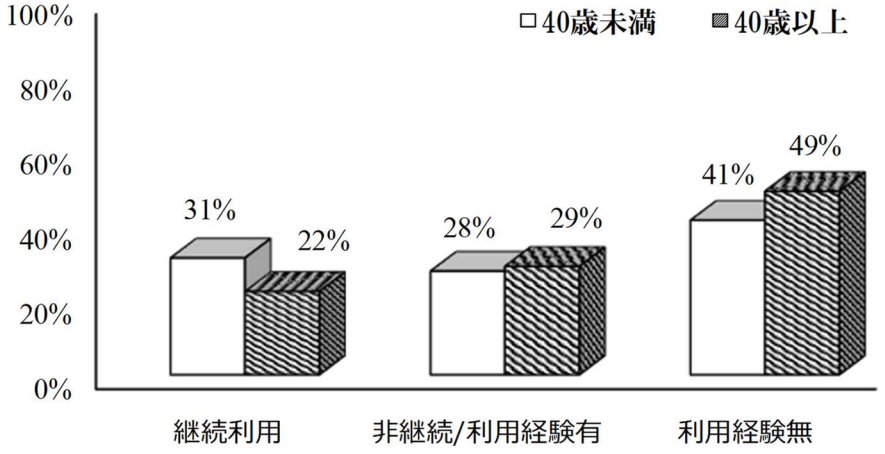


図4－23. ご本人の支援・医療機関利用の割合（家族調査）

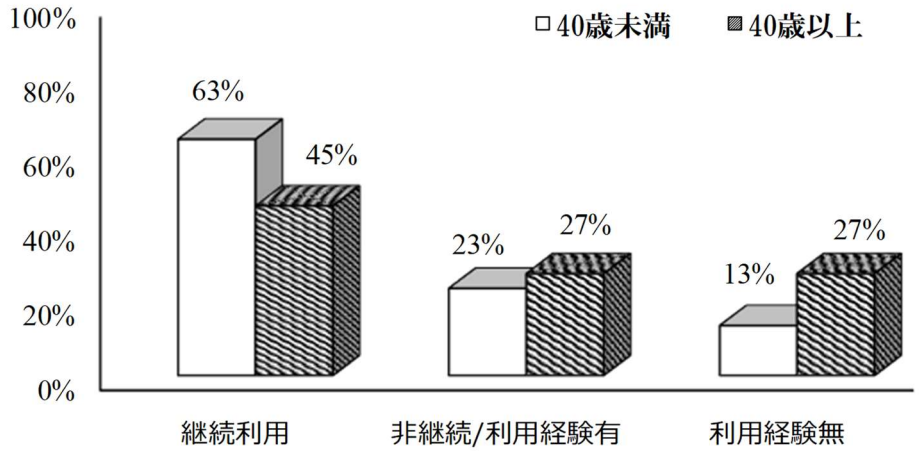


図4－24. ご本人の支援・医療機関利用の割合（本人調査）

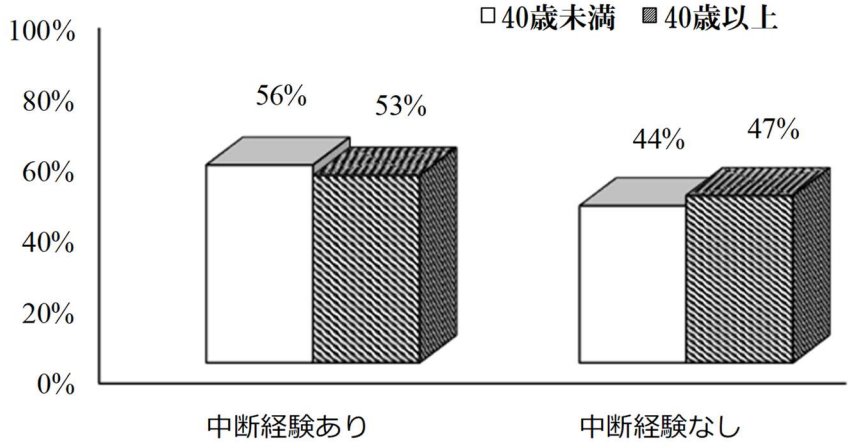


図4－25. ご本人の支援・医療機関利用の中断経験（家族調査）

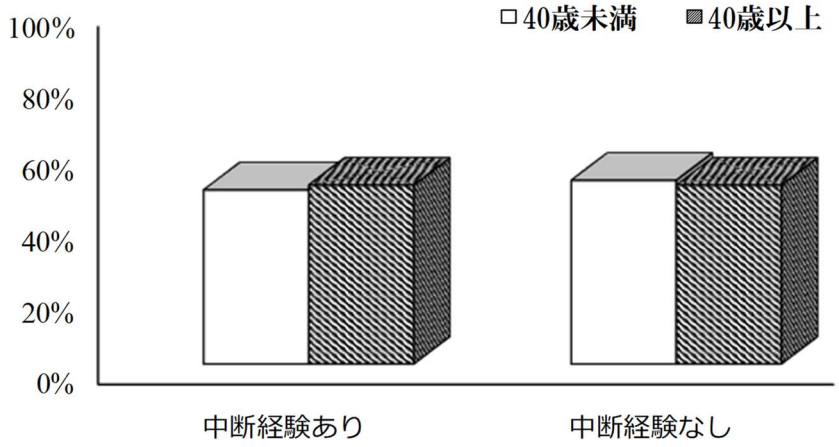


図4－26. ご本人の支援・医療機関利用の割合（本人調査）

（６）ご本人の社会参加困難感

図４－２６は家族調査，図４－２７は本人調査について，ご本人の社会参加困難感の程度を，40 歳未満と 40 歳以上で比較したものです。程度が高いほど社会参加に対する困難感が高いことをあらわしています。家族調査においては，40 歳以上は 40 歳未満よりも社会参加困難感が低いことがわかりました。その一方で，本人調査においては，統計的には年齢による違いはみられませんでした。これらのことから，社会参加困難感に対しては高年齢化以外の個人差が大きいといえるかもしれません。

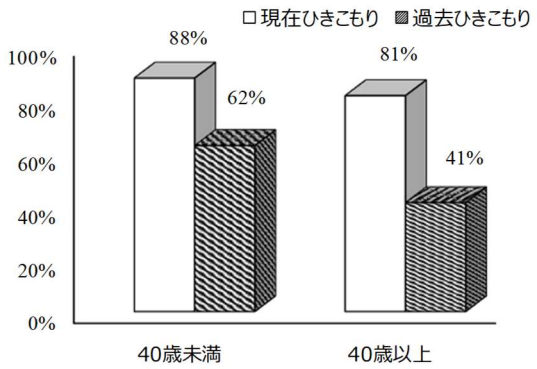


図4－27. ご本人の社会参加困難感（家族調査）

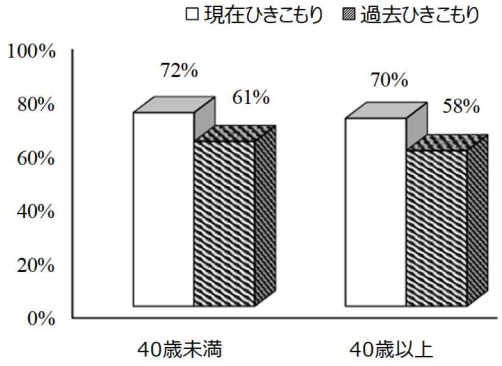


図4－28. ご本人の社会参加困難感（本人調査）